

平成27年度岡山県子ども読書活動推進会議第2回会議の概要

- 1 日 時 平成28年2月8日（月）13：30～15：30
- 2 場 所 県庁9階第6会議室
- 3 出席者 相賀委員、大村委員、白神委員、塚本委員、徳山委員、藤井委員、森本委員、湯澤委員
岡武委員、平委員欠席（五十音順）出席8名欠席2名 計10名

4 概 要

(1) 平成27年度子ども読書活動推進事業について

事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

(委 員) 本年度4つの柱で事業に取り組んでいるが、各事業に委員の方々にも関与していただいている。各事業内容についての詳細や子どもたちの姿や反応について等教えてもらいたい。読書手帳について学校や県立図書館での取組や子どもの様子等どうか。

(委 員) 本校では、校内研究として国語の研究に取り組んでおり、その柱として、並行読書等を行っている。物語文の読み取りからさらにもう一段階上を目指して取り組んでおり、読んだあと、この内容の心に残っているところやおすすめの紹介文を書くところまでを1つの授業の単元としている。自分も今、3年生で「アリの行列」の単元を行っているが、子どもたちは自分で科学読み物のいろいろな本を読んで、紹介文を書くところまで取り組んでいる。その時に、読書手帳を利用して読みためるようにしている。あまり深い感想ではないが、自分の心に残っている短い文でも、あとでわかり、振り返りに役に立っている。読書手帳は多い子で3冊記入している。子どもたちの書くことへの抵抗を危惧していたが、無理なく読書の記録として活用できている。来年度も引き続き活用したい。

子どもの豊かな心という点では、まだそこまで至っていないが、子どもの感想の内容として、「ただ楽しかった」ではなく、徐々に掘り下げて書けるようになった。子どもたちの感想を見ると心豊かになったように思う。

(委 員) 読書手帳は、図書館でも配付されているが、県立図書館での状況はどうだったか。

(委 員) 県立図書館では、児童カウンターで配付しており、自分の担当でないので、読書手帳については把握できていない。児童サービスの点では、この1月から赤ちゃんおはなし会を開催したが、とても大盛況であった。赤ちゃんのころから、ことばや親子関係を豊かにするわらべ歌に触れていくことは大切である。3月には昨年度実施できなかった児童サービス研修を開催する予定である。子どもの読書活動に関わる

方々への研修を県立図書館としても、しっかりしていけないといけないと考えている。

(委員) 高校生への読書への意識づけとして、「高校生おすすめ本」では、かなり具体的な形になってきている。以前の会議で高校生は未読率も高く、学校によっていろいろ特色があり、読書そのもの取組が難しい面もあるという話になったが、今回、具体的なアプローチができていたので具体的な内容を知りたい。本事業の経緯や取組の中で見えてきた高校の実態等教えてほしい。

(委員) 今回、選定委員としてこの事業に関わって、とても楽しかった。実際に高校生がどういった作品や作家をランキングに挙げてくるのか非常に楽しみにしていた。予想通りのものもあればそうでないものもあり、高校生目線で見ても、これはとてもおもしろいのではないかと思う。自分の好きな作家が入っていると入っていないとか、この作品は読んだことがあるとかなないと、次はこれを読んでみようというきっかけにはなったのではないかと思う。

一方で、作成した側の立場で思うことがある。高校生の最大の課題が未読率であり、第3次計画でも大きな課題としている。本事業が未読の解消や課題の助けになっているのかどうか、気がかりである。本好きな子や、どんな本を読んだらよいかわからないという理由で本を読まない子どもにとっては有効であるが、全く読む気が無い子どもや読む時間の無い子どもにとって、意味のあるものなのだろうか、そこは自信の持てないところである。

(委員) 高校生が照れがありポーズを決めて読まなかったりする、感動・家族というタイトルが前面に出ているのはとてもいい。テーマによって色合いが違い高校生の言葉で紹介されているところがあって、高校生から高校生へ紙面で交流ができていのはすばらしい。具体的にこれをどのように生かしていくかということが課題である。リーフレットを見ての感想や今後の活用の仕方など意見や提案をいただきたい。

(委員) 数年前におもしろ読書事典の中学生版の作成に関わったが、その時も同じような内容で冊子を作成したが、中学生は気持ちはわかるが文章はわかりにくい面があり、そういった手直しから始まり大変だった。中学生のおもしろ読書事典と半分ぐらいはかぶっているの、今の子どもたちはこういった本が好きなのだなと思った。おもしろ読書事典を作成したとき、各学級へ一冊の配付だったが、子どもから帰りたいという希望もあったので、薄くても全員に配付できるものがない。

また、高校生から高校生だけでなく、プラス大人の気持ちを上手に伝え、うまく橋渡しができたらいい。先生からのおすすめの本もあるようなので、そのあたりもうまくつなげていけるよう考えていくことも大切である。配付の際には、すぐに捨てられないように声かけも必

要である。素敵なものができていて、自分はとても好きでワクワクしている。ぜひ、読んでない本を読んでみようと思う。

- (委員) この中で、紹介メッセージの多い学校もあるようだが、どうしてか。その学校は何か取組をしているか。
- (事務局) 紹介メッセージを選定する際、紹介メッセージの内容を基に紹介者の思いとその本の魅力等が伝わってくるものを選んだ。紹介メッセージの採用が多かった学校は、応募数が多く、応募者が3年生であったということから、結果的に採用が多くなっている。その学校の具体的な取組はわからない。
- (委員) 補足であるが、学校によって本事業への取組が大きく違い、学校間で格差があった。応募のあった学校のうち、応募数が大変多かった学校が4校あった。ただ、選定の際、できるだけ応募のあった多くの学校から採用するように配慮している。
- (委員) こういった紹介メッセージは、人に読んでほしいという、伝えたい思いがないと書けないものである。こういった文章が書けるのは、しっかりと本と向き合っている学校であると思う。この学校がどういった取組をされているのかかわかるとよい。
- (委員) 県立図書館でも展示等で紹介するということだが、ぜひ、本図書館でも展示して紹介したい。中学生や高校生が作ったコーナーは注目されることが多い。自分たちと同じ中高生が選んだ本は手に取ってもらいやすいのではないかと思う。参考にさせてもらいたい。
- (委員) 先生からのおすすめの本もあるようだ。高校生の娘が学校から持って学校新聞に、先生が高校時代に読んだ本で心動かされた本の紹介が載っていることがあり、紹介メッセージを読んでいると、自分も引き込まれ、その本を読んできたくなる。高校生から高校生への紹介もいいが、各学校での先生方の紹介本も紙面で伝えるなど、大人から高校生へ読んでほしい思いを伝えていけたらよい。
- 次に、親育ち応援学習プログラムが完成したということだがこのプログラムについてはどうだろうか。
- (委員) 今回、乳幼児への読み聞かせ・家庭の読書推進というテーマで、プログラムを作成することになった。子どもの読書支援＝読み聞かせと思われているが、読み聞かせはあくまでもたくさんある読書支援の手段の一つでしかない。それに加えて、同じ読み聞かせでも、乳児への読み聞かせと幼児への読み聞かせとでは、全く別物で、ねらいもやり方も効果も全く違ってくる。今回は、読み聞かせの手法がびったりで、そのまま読書推進につながる年齢の幼児期の家庭での取組と的を絞って作成した。
- ねらいは、親子で楽しい時間を共有し、親子の絆を深めるツールの一つとして読み聞かせがあるのであって、読み聞かせについて日々悩んだり困ったりしている保護者のハードルをさげて、気楽に読み聞か

せをしてもらい、親子での楽しい時間の共有が、ひいてはその子の読書へのプラスの考え方につながり、最終的に読書支援になる。それと、保護者に図書館をもっと利用しようという気持ちをもってもらうこともねらいの一つとしている。子どもは、一人だけでは図書館に行けないので、幼児や園児は自分から本に出会えることはできない。そんな中、保護者に図書館に行ってみようという気持ちになってもらいたいという点からもプログラムを考えた。

内容としては、図書館でよくあるエピソードについて、どう思うか、自分ならどうするかということ問いかけ、親同士で考えていく中で、読み聞かせについて、困っていることや思っていることを出し合い、気持ちを共有し、高めるというものである。また、もっと知りたいことは、資料の中から感じ取ってもらえるようになっている。子どもの中には、親子の触れあいを求めて本を持ってくる子どももいるので、本を仲立ちに、家庭ではどんな本でもいいのでいい時間をもってほしい。さらに、幼稚園や保育園で良書を手渡し、つないでいけたらよい。実際にプログラムを試行してみて、参加者からは、こちらが期待していた感想が返ってきている。

(委員) 実際にこのプログラムを参加者として体験してみて、とっても楽しかった。絵本を好きな人って本当にたくさんいて、絵本ってやっぱりいいものだと改めてわかり、ますます好きになった。

自分がいかに保護者に伝えていくかということを考えさせられた。子どもの未読について、読む人は読むが、読まない人は読まないといった話になるが、保護者も同様である。参観日の時など保護者に、子どもが先生に本を読んでもらっている時の顔を見てもらうようにしている。家で見たこともないような顔を見せてくれるので、そういった子どもたちの顔を保護者に見てもらうことは大切である。また、保育者・教育者としては、幼稚園や保育園では、育ちにつながるような本をみんなで研究していく必要がある。経験したことがそのまま絵本に出てくる、子どもの世界を味わえるような経験をさせることができたらと思っている。

以前から、同じことを繰り返し行っているが、読書の二極化について、どの子どもにも同じ経験をさせてやりたい。保育園や幼稚園の現場にいる先生がもっと研修等で、子どもの育ちや必要に応じた本を研究していかないといけないと思う。好きな本も大切だが、それ以上に、読んだ時に親も子も心豊かになれるように、プロとして見せていけるようにしていきたい。それが保護者への支援ではないかと思う。また、当園にゆかりの方で「本が大好きで、保育現場へ協力し役に立ちたい」と言われる方がいるので、そういった方との交流も大切にしていきたい。

(委員) 保育現場では、どのように子育てをしていいかわからないという保

護者者もいる。読み聞かせが一つの手がかりとして、良い親子関係を築いていってほしい。

(2) 第3次子ども読書活動推進計画について

事務局から資料により説明した後、各委員から御意見をいただいた。

(委員) 中学校では、朝読書を通して、本とふれあう機会を設けている。冊数や機会の設定をすることも大切だが、さらにもう一つ考えなければいけないのが内容についてである。自分だけの読書に留まらず、広めていく活動や内容を共有していけるような活動が学校現場で取り入れていくことができれば、本に親しむ子が増えるのではないかと思う。また、学力状況調査でも話に出てくるが、子どもの書く力について、書くことを苦手としている生徒が多い。どう表現すれば良いかわからなかったり、言葉を知らなかったりということは、本の深い読みが関係してくるのではないか。一人読みも大切だが、そこから、楽しかったことや考えたことや感じたことを、広めていくような、場の設定していくことが大事なのではないかと思う。

(委員) 本の深い読みということが中学校では求められるものである。中学生の思春期の時期は、進路や人間関係等迷いや悩みがあり、本が救ってくれる場合もある。量より質や読み方という点も重要となってくる。学校における読書活動の課題としては、人材育成の研修等挙げられるが、研修についてのニーズ等はどうか。

(委員) 高校では、司書の研修等は充実していると思っている。正規職員が多いということもあるだろうが、3つの地区でも司書部会等それぞれ研修を行っており、参加しようと思えば、6～7回くらいチャンスはある。図書館協会や県からの研修案内等含めると10回程度はあると思う。小中学校が問題である。

(委員) 小中学校では、勤務状況として兼務の学校もあり、当市では正規職員が少ないため、研修等に参加することは難しい。先日も、岡山県で中国地区の研修会があったが、2日間の参加は難しかった。もっと研修会へ参加したいという声もよく聞くので残念である。高校では多くの研修の機会が保証され、選択の幅があるのはとてもうらやましい。また、人材育成の点から、1校に1人の配置というのは課題となるだろう。

(委員) 1校1人の専任となれば読書計画もできる。当市においては、学校の職員会議等で、ボランティアの活動も含めてきちんとした計画を立てている。

(委員) 学校現場での理解が必要であり、小・中学校での具体化は難しいが、学校でのニーズは必ずあるので、保証していくことが課題であるということが認識できた。

家庭教育支援として課題や今後の取組等についてはどうか。

- (委員) そこで幼稚園や保育園で働いているものへの配慮が必要である。幅広く家庭支援が必要であるが、誰がコーディネートするのか、誰がつながるのかといったことがいつも手薄で課題となる。
- (委員) 先ほど研修が課題だという話が出たが、子どもと家庭をつなぐ保育の現場において、自己研修を積んでいくことも大切だが、特定のテーマに従って、みんなと一緒にできる具体的な研修の場がぜひともほしいという意見があると改めてお願いしたい。実際に子育ての状況としてはここを支援していくことは重要である。
- (委員) 幼稚園長の方から「若い先生方が本を知らないのです、本と現場をつなぐ力が薄くなっていて、そこを何とかしていきたい」と言われていたのを聞いたことがある。若い先生が子どもの実体験と本をつなぐ研修があれば良い。そのあたりの充実が課題である。
- (委員) 同じ研修をするなら、若手だけでなく、園をあげて行う方が取り組みやすい。ベテランの先生や若手の先生と一緒に研修を受けていると、実生活に結びつくことができ、園をあげての研修の方がより有効である。こういった研修を提案されることを期待する。
- (委員) ほとんどの自治体で乳児健診の頃にブックスタートを行っており、多くの赤ちゃんはその時に初めて絵本に触れる。その後絵本に触れるのは、幼稚園や保育園の入園以降となる家庭も多いと思う。この2、3年間の空白が大きな課題となっている。当館でも、この空白の時間を埋めることができていない。ここ数年、幼稚園や保育園の先生は絵本の読み聞かせに力を入れてくれている。入園までの家庭での読書にも目を向けてほしい。
- (委員) 県立図書館では、1月からわらべ歌も取り入れた、赤ちゃんおはなし会を始めているが、今の子どもたちはわらべ歌に触れる機会が少なく、知らないわらべ歌も多いのではないだろうか。昨年の秋に研修を開催したが、わらべ歌の良さとして、親子の触れあいや言葉が発達していく素地をつくるという面でもとても大切であると感じた。親プロのようにPTA活動の中で取り組むなど、学校現場でも取り組んでいくことが大事だと思う。
- (委員) 本を読んだ量ではなく次の段階として質という点で、親子関係でブックスタートの始まりの部分からが大切である。今はスマホの登場で親子のかかわりが大きく変わっている。授乳の時からスマホにばかり目が向いて、赤ちゃんに目が向かないので、情緒が安定しない子どももいる。実際に、わらべ歌をしていると親子の現状が垣間見れる。情緒が安定していない親子に本を薦めることが、その後の読書につながるのかという問題提議になる。情緒の安定につながるような関わり方は最終的には読書支援つながっていくことではあるが、実際に保育の現場を見ていて、土台の部分が弱いと感じている。ぜひ、こういった

支援を手厚くしてほしい。一声掛けると実際多くのお母さんが集まってくるし、こどもが喜ぶ姿もうれしいが、お母さん自身が安心できる。お母さんの安心がないと子どももなかなか安定しない。わらべ歌はことばにつながり、音楽やリズムを基にして発することができるものなので、ぜひ力を入れていってほしいところである。

県立図書館の機能を充実した子どもの読書活動推進として、新たな課題として公共図書館・学校図書館・読書ボランティア等との連携・協働があげられるが、具体的にどうすれば良いか。

(委員) 県立図書館主催で子ども読書に関する研修を持つ機会は限られている。連携のコーディネイトの面で、誰が行うのか役割を明確にすることがとても大切で、組織的な面でも具体的にどのように進めていくかが課題である。館内でもいくらか提案をしているところである。個人的なことであるが、昨年12月に、東出雲の小学校の授業見学に行った。学校図書館がとても充実している先進的な地域である。そこでは、行政がリードし研修の場を設けているようである。やはり行政がリードしていくことも大切だと感じた。それぞれの自治体の状況があるので難しい面があると思うが、その地域の行政がどのように学校図書館の充実等を推進していくか、地域の公共図書館が学校図書館とどう関わり、それを県立図書館がどうバックアップしていくかといった関係性になってくるのではないか。地域行政、公共図書館、県立図書館との役割を明確にする必要があり、そういった話し合いの場もあればよいと考える。

もう一点、年明け、岡山市の学校司書の方にお話を聞く機会があった。岡山市の司書は歴史がありこれまでの積み上げがある。お話を聞かせていただいた司書の方はすばらしい取組をしていて、先生のバックアップを行い、授業や授業以外でも子どもたちに本をつないでいる。そのつながりがあるからこそ、子どもたちが本とふれあうことができる。子どもと本のつながり役として司書の存在は大きい。岡山市の取組は歴史があるが、今まで県立にいながら接点がなかったのが勿体ない。県立図書館は、いろいろなところとの接点を作って、よい活動事例等を知ってもらえるよう工夫していくことが大切であると感じた。

新しい動きとして、高校でのアクティブラーニングがある。「自ら学ぶ」という点で、いかに自分で情報を収集し活用していくかが大切であり、そういった意味でも図書館活用の重要性が高まっている。今後、図書館もアクティブラーニングやメディアリテラシーの動きをもっと知っておかなければならない。そういった意味で学校図書館が、どのように学校教育の中に寄与していくかが大切である。連携・協働を考えると、コーディネーターは大事なところであり、誰がどのようなことをしていくかが重要なところである。

(委員) 当図書館は、県立図書館の充実した資料に助けられている。県立図

書館が公共図書館や学校に対して行っているサービスを知らない学校司書や先生方も多いので、周知していくことが大切なのではないかと思う。